奇跡の機関車

米田淳一

春の昼下がり

「さて、今日の昼飯は何かな?」
　北急相模大川車両工場で整備員のひとりがそうつぶやきながらボルトを締めている。
「昼飯の心配する暇があったら作業に集中。ボルト一本事一発。ボルトの締めは仕事の締めだ。きっちり締めろよ」
　と職長がたしなめる。
「わかってます」

　春とはいえ、工場の外の桜はもう葉桜になりかけ、差し込む光の強さも初夏を思わせている。
　震災があった3月から1ヶ月以上経ち、電力不足の緩和で北急電鉄もロマンスカーの運転を再開したりと一見復旧しつつあるように見えるが、未だ特別ダイヤでの運転が続いていた。
　それでも車内放送では沿線の桜の見所等を含めた観光案内を例年通り行なっている。
「お客様にご案内します。これから当列車は北急沿線の中で一番美しい桜の名所を通過いたします」

　放送している列車が過ぎ去っていく工場では、なおも作業が続いていた。
「そういや社内食堂に減塩メニューがあるけど、あれ誰のためなんだろう？」
「だって僕ら、仕事でものすごく汗かくから、塩分制限どころか塩分取らないと大変なのに。
　社食にしては結構凝った料理だけど、あれで誰が得するんだろ？」
　すると、主任が頷いた。
「あれは、『善さん』という、定年を過ぎてもまだウチに出入りしている、我が北急の生きながらにして伝説の機関車整備士のためだ」
「伝説の整備士！？　一体どんな人なんですか?」
「そうか、君は今年入社だからまだ会った事がないかもな。
　善さんは、技術が高く、やさしくて、包容力があって、温かで、コクがあって、強いうまみがあって、塩加減が絶妙で、歯応えがあって、グラシアスで」
　主任がうっとりする。
「･･･"コクに旨み"って、料理じゃないんだから」
「まあ、それだけ味のある人物って事さ。なにしろ善さんは戦前からここにいるんだからな」
「ええっ、それじゃぁものすごいお歳じゃないですか」
「ああ。でもまだまだお元気で、工場の生き字引として工場長からも一目置かれる存在だ。
北急にもいくつかの不遇の時期があったが、記録さえないようなその暗黒の時期のことは善さんに伺うしかない」
　そのとき、表で機関車のメロディアスなホイッスルが鳴った。
「EH510だ！」
　EH510とは北急の誇るハイパワー交直流旅客機関車である。
パンタグラフ換装工事の為のドック入りの筈だが　何やら後ろに１両ぶら下げている。
上回りこそシートで完全に養生されていたが、足回りの大動輪を見るに蒸機であることは間違いない。

「ということは、例の罐が来たんですね」
「ああそうさ。今度ウチで動態復元するC57だ」

　EH510の後ろにはC57。他社で保存されていたものが北急に譲渡され、記念列車牽引に復活することになるのだ。
　そして次々とJR貨物に派遣した北急の機関車が戻ってくる。

　それとともに、優秀さを誇った北急の甲組機関士たちが戻ってくる。
　北急機関士甲組の旗を先頭に。
　来島は、社長に敬礼したあと、運転士乙組の彼女にも敬礼した。
「北急機関士甲組、ただいま相模大川に帰着しました！」
「よくやってくれた。これから日本全体が逆境の中、被災をまぬがれた地域は被災地を助け、自らの経済も復興せねばならない。
　我がBCE、NFEのクルーズもいずれ再開するつもりだ。それが観光地の復活、そして日本経済全体を持ち上げる一助になればと考えている。
　まだまだ震災は救援の段階から復興へ進む途中だ。
　しかし震災救援に活躍してくれた君たちが、無事に技量を発揮して救援輸送に活躍し、こうして帰着してくれたことを、社長として大きな誇りに思う。
　みんな、よくやってくれた」
　社長はそう言うと来島と堅く握手を交わした。
　そして、乙組の彼女が前にたった。
　来島は、口にした。
「ただいま」
　彼女は、満面の笑みで答えた。
「おかえりなさい」

北急では、以前からD51 1119号機の修繕と動態保存を行っている。
その経験を買われ、今回の復元プロジェクトが発足したのだ。

譲渡をうけたC57は、静態保存とはいえ野ざらしではなく屋根を設けた保存展示場で守られていたためか、風雨による致命的な腐食等も見られず作業は概ね順調に進んでいるかに見えた。
しかし、現場で作業する皆は生まれたときにはSLが全廃されていたような歳の若者も多く、また指導する側も物心ついたころには蒸機の時代が終わっていたような者がほとんどである。
その結果、作業はすこしずつ遅れ始めていた。
「だからさ、ここの合いがうまくいかないんだよ」
「その運転時の釜の熱による膨張はここで逃げるでしょ？　その分ここをゆるく作ってあるんじゃないかな」
「でも緩すぎると落ちるだろ。特に蒸機は板バネと釣り合い梁の足回りに往復運動機関。振動も大きいぞ」
「図面に組み付け方なんざ載ってないだろうし、帳簿に何か書いてないのか?」
「ないなあ～。どうにも各員研究工夫のことみたいになってる」
「そんなのどこの鉄道模型キットだよ。こいつぁ本物の釜だぜ」
みなが思案に暮れる。

「こんな時、善さんがいてくれりゃ助かるんだが･･･」
額の汗を拭いつつ、主任がボヤく。

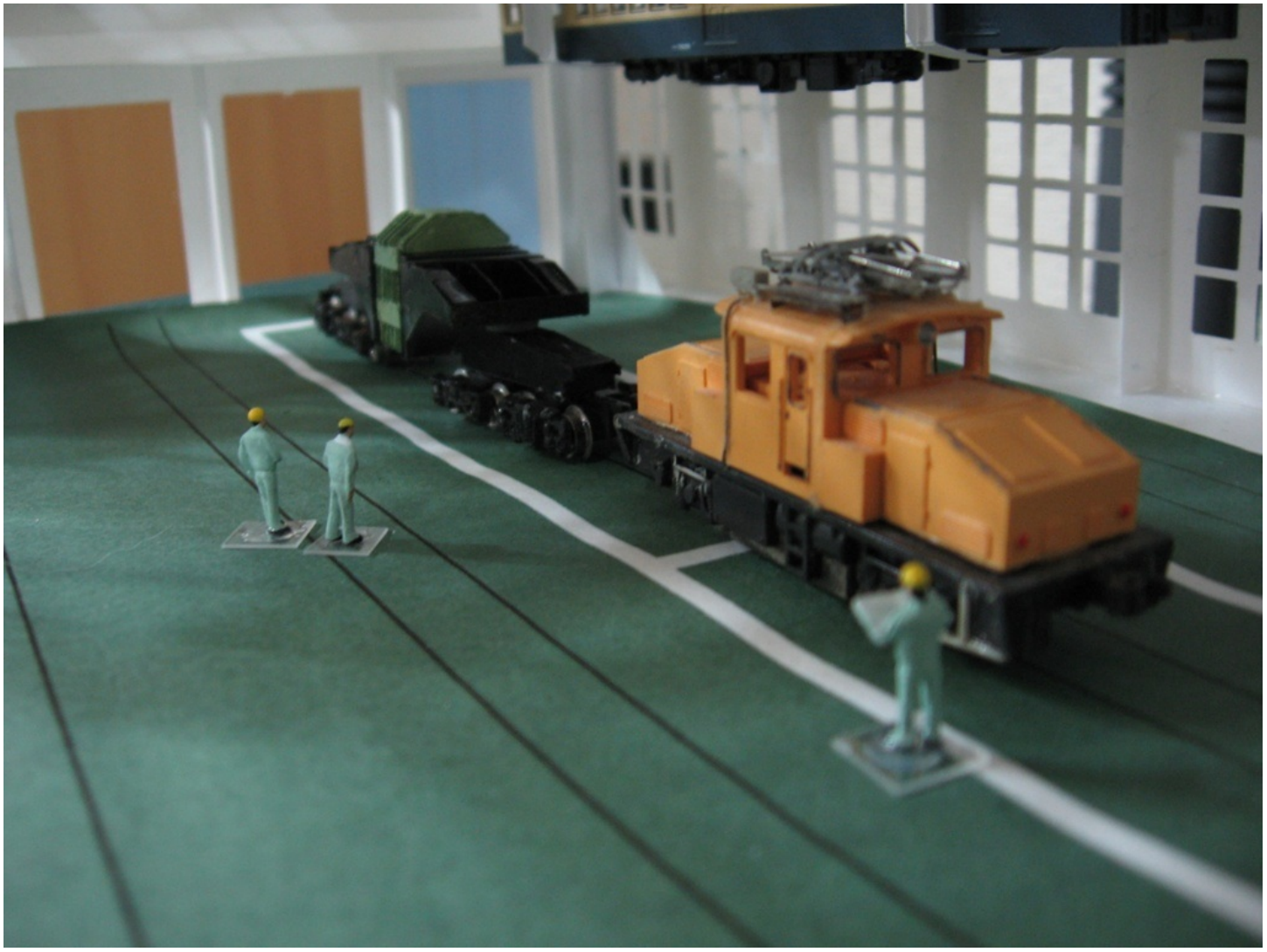
しかし善さんってどんな人だろう。
定時が過ぎても皆がそれぞれに残りの仕事に励んでいるところだった。

「おうっ、皆の衆！　がんばっておったか！」
　細身の老人がひょいと現れた。

「善さん！！」
　みんながあつまる。それも整備員も運転士も、そして隣接する駅の非番の駅員もみなだ。
「帰ってきてくれたんですね！」
「善さん！」
「ちょっと病院での検査が長引いてしまっての。でもちゃんと戻ってきたぞ！」
「嬉しいです」
「で、こいつは土産じゃ。たんと食え。入院していた病院の前で売っておった」
　そう云ってレジ袋を差し出す善さん、
　中にはパックされた見るからに旨そうな肉が何袋もどっさりと入っていた。
「高座豚！？」
「味噌漬け！」
「よし、折角だから今日はこの辺で切り上げて飯にしよう」
　工場長の声で、さっそく夕食の場が設けられた。
　ドラム缶を切って作った現場らしい即席コンロで炭火を起こし、焼き網をセットして焼き始める。
「店に知り合いがおるでの、頼んで安くしてもらったんじゃ。遠慮するな」
　皆が食べた途端に叫ぶ。
「旨い！」
「ジューシー！　そしてこの深いコク！」
「さすが県央の名産品！　こりゃ飯何杯でも食えるよ」
　ジューシーな高座豚の美味さが、慣れぬ整備で疲れていた皆の心を潤していく。

　善さん。
　お歳だけど、矍鑠（かくしゃく）としていて声も張りがあり、また目付きも実に優しい。
　大きくて、それでいて繊細な手と腕を見るに現場の力仕事は少々厳しそうに思えるが　未だ現役バリバリだというのだから頭がさがる。
　こんな素敵な整備士が居てくれると思うだけで、困難な修復作業でさえも成し遂げられそうな気がするから不思議だ。

　食事の後はビール片手に工場の野外作業場で夕涼みがてら、善さんが円座になった皆の悩みを聞いてくれる。
「そうか、おまえさんたちにゃ蒸機の整備は難しいか?」
「理論的なところと実測値の差、そして微妙な合いの調整がどうにも雲をつかむような感じで」
「生まれた時からデジタルの世代の若いおまえさんたちにゃ大変だろうが･･･」
　そう言って紙コップに注がれたビールを飲み干す善さん。
「まあ、どうしようもなくなったら、ワシに訊きんしゃい。
　罐のことなら任せんしゃい。
　どんなにしくじっても、絶対に直してやるからの」
　その力強い言葉は皆の胸を強く打った。
「善さん！」
「俺たち一生、善さんについていきます！」
「おいおい、ワシはそんなに長く生きちゃおらんよ」
　と照れ臭そうに善さんが笑う。



それからというもの、現場の意気は常に上がりっぱなしだった。
皆、恋に落ちたように善さんのその誠実な仕事ぶりと人柄に惚れ込んでいった。

罐整備の神様・善さんが現場に居る安心感は、皆を、そして皆の仕事を充実させた。

　相模大川工場の一般公開は初めてであった。
　秋に抽選で子供を招いてのことはあるが、一般向けは恵日奈で北急ファミリーフェスタとして行うのが常だった。
それを震災の今年は相模大川で行う。
　チャリティーオークションも行われるが、一番の目玉は北急に譲渡されたC57の復活運転だ。
　またE655系や北急の旅客釜群も展示する。
　万全の整備を目指して、日々の作業に皆全力を尽くす。
　その中心に、善さんがいた。
「お身体大丈夫ですか」
「なあに、関西じゃN40改装で103系がまだまだ第一線で走っておる。機関車整備士のワシも頑張らねば釜たちに申し訳ない」
「でも善さん、ご家族は」
　言いかけたその途端、皆が「ビーッ、ビーッ、運転士さん！運転士さん！オーバーランしてるよ！」と電鈴を鳴らして抗議する車掌の真似をした。
　皆の間で善さんの奥さんのことは、タブーらしい。
　しかし、そんな昼下がりだった。
「え、えーと、ハイ、ディス、イズ、ホク、キュウウ、エレクゥトリック、レイルウェイ、カンパニ、で」
　詰所でたどたどしく電話している彼女から受話器をサッと奪ったのは、クルーズのない今他の配置で働いているBCEのパーサーだった。
「Es wurde auf dem Telefon ersetzt. Ich kann mich, deutsch, sprechen.」
　彼女の話す言葉は流暢なドイツ語だった。
　さすがは国際的にも知られた北急の誇るクルーズ列車BCEのパーサーである。
　やりとりのあと、彼女が通訳して言った。
「ドイツからお客様がいらっしゃるけれど、車椅子なので大丈夫ですか、だって」
「工場内へお越しでしたらピット等の段差にさえ気を付けて頂ければ大丈夫かと思いますが」
「じゃあそう伝えておくわ。あと、ヨシカワというかたはお元気かと。
　北急の相模大川工場にいると聞いたと」
「ヨシカワ・・・　さぁ・・・?」
「じゃあ、調べてから折り返し電話しましょう」
　その時だった。
「善さん!!!」
　大声と悲鳴が聞こえた。
　工場で作業中の善さんが倒れたのだ。
　すぐに救急車が呼ばれ、搬送されていく。

　担架で運ばれる間中、善さんは「あの資材庫の奥のビニールシートには決して触るんじゃないぞ」
　と弱った声でしきりに繰り返していた。
「わかりました。大丈夫ですから」
　サイレンを響かせ工場を後にする救急車のテールランプを、皆が不安まじりで見送った。

来訪

　しばらくしてドイツからのお客様がやってきた。
　なんと御歳を召した女性だった。純白の肌を日焼けさせぬ様にと、日傘をお付きの方が差している。
　まさに純正ドイツの貴婦人である。
「ここにミルヒ号があるはずと言ってるわ」
「ミルヒ号？　なんだろう。知らないよな」
「ああ」
「でも、必ずヘル・ヨシカワが整備しているはず、と」
　小声でヘルHerrっていうのはドイツ語で英語のミスターと同じよ、と通訳になったパーサーが添える。
「失礼かもしれませんが、そのヨシカワさんとどういうご関係で」
　彼女は、シワをたたんだ顔を真っ赤にして、恥じらいながら、しばらく後に口にした。
「Es ist die Person meiner ersten Liebe.（私の初恋の人です）」
　その時だった。
「やれやれ　善さん保険証と診察券置きっぱなしのままだよ。
　へー、善さん、みんな善さんって呼ぶけど、ほんとうは由川善一郎（よしかわ　ぜんいちろう）っていうんだ」
「ええっ　ヨシカワ?！」
「善さんが『初恋の人』だった！？」

　彼女の話はこうだった。
　戦前、ドイツ山間の盆地の小都市の小さな鉄道・乳牛鉄道（Milch Holstein（ミルヒ・ホルスタイン）鉄道）とよねでん線の提携記念に設計図を交換し、北急相模大川工場で作成した機関車があった。
　それがミルヒ号という機関車らしい。
　すぐに皆が記録を見るが、さっぱり見つからない。
「帳簿にそれらしい記述は無さそうだ」
「製造簿と整備簿に機番が載っていないなんて」
「何かの勘違いじゃ･･･」
　諦めかけたその時、彼女が何かをじっと見ていた。
　その視線の先は、整頓を心がけても雑然としてしまう工場特有の風景のさらに奥の暗がりだった。

「資材庫？　……まさか！」
　みなが気づいた。
「でも善さんに悪いよ」
「あれだけ触るなっていっていたのに」
「とはいえ70年近い恋だぞ。このままでいられるか！」
　彼女も深く礼をした。
「ヘル・ヨシカワとミルヒ号は、写真でしか知らないのです。
　どうか一目、拝見させてください」
　その言葉に皆は決意した。
　そして、皆でかぶさっているグリーンのビニールシートをめくった。
「これは！」
　その姿に皆が息を飲んだ。

　姿を現したのは、小型の機関車だった。
　深い緑色の箱型車体。
　赤く塗られた足回りに磨き上げられたロッド。
　正面と背面は縁の丸い優雅な3枚窓、他の角もやさしく円を描き、そして内部には黒光りしたボイラーが整然と収まっている。
　各エンドにはカンテラ式のテールランプ、正面にはおへそライト、背面は屋根上に小さなライトが載せられている。
　手すりも優しい曲線を描き、国産の古典機にはない異国情緒あふれる気品と貫禄を放っていた。
「これは　ひょっとして・・・」
「スチームトラム！？」
「ええ」
　彼女が言った。
「これが、ミルヒ号です」
「我社ではそれをＭ式１号機関車と、かつて呼んでいたんだ」
　樋田社長の力強い声が工場内に響く。
「なぜそのことが記録に残っていないんですか」
「このミルヒ号の落成は1941年10月だ。これでわかるな」
「戦争が始まる2ヶ月前じゃないですか！」
「ああ。当時の日本はすでに満州事変以降で苦しくなっていて、不要不急の鉄道はそこに居た機関車や線路の鉄を供出するために次々に廃線へと追い込まれていった。
　ミルヒ号ももともと友好記念機関車だったが、当時の世相だ。不要不急の自粛の空気の中で危うく鉄材として供出されていただろう。

　だが、このミルヒ号の最初の構内試運転のハンドルを握ったのが・・・」
「善さん」
「そうだ。以来善さんはこのミルヒ号のことを特別に隠しながら整備していた」
「そうか、だからこの前行方不明になった俺のレンチがここに!?」
「あ、それ俺のハンマー！」
「私のスパナも！」
「いつのまにかちょろまかしていたんだろう」
「善さん、さすが抜かりないなあ」
「でも、こうやって工具を使っていたということは」
「善さん 今もずっと整備を続けていたんだ。だから・・・」
「この子、動くかも！」
　早速コンプレッサーの圧搾空気を用い、ミルヒ号の耐圧試験が開始された。
ボイラや安全弁、空気配管等に損傷や漏れがないかを一つ一つ確認していく作業だ。
　キャブ内で皆が圧力計の針を祈るような思いで注視し続ける。

　圧力が上がっていく中で、プ、プッブーッ、ブー！　と安全弁が動作し、コンプレッサーで作った空気が抜ける。
「安全弁テストオーケです。動作圧力、規定値です。あと、目視で見た限りですが材料の劣化もなさそうです」
「ボイラ圧力も正常値。圧力漏れも許容範囲内です」
「溶接の具合を見よう。エコー探傷器持ってきたか?」
「もうやってるよ。エコーで見る限りすごくきれいな溶接になってる。俺たちなんかよりずっと上手い!」
「圧力だけなら大丈夫そうだ。あとは熱に耐えられるかだな」
「多分耐えられそうだけどな。こりゃ、ますます火入れてやりたくなってきた」
「この罐、まだ生きてるぞ!!」
　そのとき、年老いた彼女が驚いたことに、力を振り絞って車椅子から立ち、笛ハンドルを引いた。
　力はまだないが、なんとも愛らしい汽笛が鳴った。
　それが、日も傾いてきた相模大川の構内に響き、そしてとなりの街田駅を出発するロマンスカーVSEのミュージックホーンの響きと共演した。
　その時、声がまた別に聞こえた。

たどる記憶、若き力

「あれ程触るなと言ったのに、お前たちやっぱりやったのか。懐かしい音色が聞こえた気がして来てみたが」
　そこには病院帰りの善さんがいた。
「すみません！　善さん」
「構わんよ。こういう事情じゃったのか」
「それよりお体の方は大丈夫なんですか?」
「なあに、この歳になりゃあちこちガタが来るのはあたりまえだ。ちゃんと身体は管理しておる。たまにフラつくが、たいしたことは無い」
　そう言って深く溜息を吐(つ)いたあと、善さんは過去の記憶を、ゆっくりと語り始めた。

「若き日のワシは、落成したばかりのこのミルヒ号を守り続けた。
　過剰な自粛にも耐え、さらにはせっかくの車籍簿も抹消して機械扱いにしてさえも守った。
　でも、どうしても守れない相手がいた」
　その相手とは、悪化する戦局の中での空襲だった。
　大激戦の末に米軍に奪われた硫黄島の飛行場から米軍の戦闘機P-51がやってくるのだ。
　普段は陸海軍の厚木飛行場、現在の自衛隊厚木基地を襲撃するP-51が、その日、たまたま相模大川工場を襲ったのだった。
　その日は空襲警報が鳴る間もなかった。
　爆音が接近し、「退避！」の叫び声が響く中、みな防空壕に逃げ込んだ。
　しかし善さんは居ても立っても居られず、一人豪を飛び出して工場へ舞い戻ろうとする。

「馬鹿野郎！　戻れ由川！ 死ぬ気か！」
　工場長の必死の叫びも耳には入らなかった。

「ミルヒ号をなんとか守ってやりたい」
　その気持だけが彼を動かしていた。

　ミルヒ号の居る資材庫へと駆け戻って、無意識にバールを手にして、空を見上げる。
　勝ち目は無いに等しいが、せめて！

　窓越しに旋回する敵機を捕らえた。
　だが、その姿は、戦争中最強の名をほしいままにするほどに、あまりにも整いすぎていた。
　無塗装の銀色の機体に太陽を反射してくるP-51は、すべての望みを残酷に断ち切る巨大な鋏（はさみ）の刃のように輝いていた。
　無力感のなか、必死にバールを構えようとした。
　具体的にどうやって防ぐとか、そういう合理的な判断はできなかった。
　ただ、このミルヒ号なしに生きることが考えられなかったのかもしれない。
　死ぬなら、せめて一緒に。
　このミルヒ号を見捨てて生きてはいられない。
　爆音とともに迫りくるP-51の主翼から放たれる12.7ミリ機銃の　明らかに自分と眼前のミルヒ号を狙ってくる発砲炎に釘付けになってしまった。
　ぱぱぱっと着弾と共に破片が舞い、土煙が迫ってくる。
　すまない、ミルヒ号！
　死を覚悟したその時、かたわらにあったオイルのドラム缶に引火、その爆発の衝撃で吹き飛ばされた。

　気づくと、工場の灰色のタタキの上によこたわっていた。

　着ていた作業服は破け、口の中も切ったのか、喉まで血の嫌な味でいっぱいだった。
　それでも体中についた傷の痛みが来るより前に「ミルヒ号！」と言いかけたが、何故か肺袋が叩かれたように声が出ない。
　喉がつっかえる苦悶の中かろうじて立ち上がると、機銃掃射を受け飛び散って燃える破片と薄い煙の中に見えたのは、ミルヒ号が、工場の車庫ごと無残に蜂の巣となった姿だった。
　善さんは、慟哭（どうこく）した。
　釜を守ろうとしたのに、逆に釜が身代わりになってくれたなんて！
　非力に泣きたくても、あまりにも現実は厳しすぎた。
　しかし、それでもミルヒ号の3枚窓の正面の表情は、いつものように、あのにこやかさを保っていた。
『生きて、僕を直してください。
　あなたが生きてさえいれば、僕を再び蘇らせる事が出来ます。
　私もあなたも、人間と釜という違った形だけど、同じ命なのです。
　だから、生きてください』
　被弾したミルヒ号が表情で訴えているかのように見えたのだ。
　その瞬間、堪えていた涙が堰を切ったように、とめどなく溢れ出た。
「心配するな、お前は必ず俺の手で復活させてやる！　必ず！」
　穴だらけの車体に寄り添い、涙ながらそう繰り返した。

　その日から善さんは、全精力を注いでミルヒ号の修復作業に勤しんだ。
　そして、再び火を入れられるようになった1945年8月、戦争が終わった。

　それからあとも善さんの戦いは続く。
　時代が、技術が、ミルヒ号をどんどん追いやっていく。
　もう本線を走るのも無理だったのに、善さんは昼は普通の整備、夜はミルヒ号の整備と明け暮れていた。
　そんな中、戦後最大の世界的な金融危機によって、北急が経営危機に陥った。
　その危機に乗り込んだハゲタカと呼ばれるファンドの人間が、樋田だった。

鉄道の社会的意義すら問い直す冷酷な金融マンの樋田の前に、みな震えあがった。
善さんはその時、樋田社長に、「このミルヒ号だけは守ってくれ」と頭を下げた。
「電鉄会社に機関車など要るものか」と一度は冷たく切り捨てた樋田だった。
だが、資産評価として査定に視察を重ねる内に、その気持ちが痛いほどよくわかってきた。
鉄道には、利用する人にも、運転する者にも、整備し保守する者にも、それぞれに大切な物語がある。
喜怒哀楽ばかりか、それを受け継いでいく歴史さえも、鉄道の上にはある。
無駄といってしまえばそれまでだが、歴史あるものを易々と廃棄してしまって良いのか、
現場の願いを、また北急電鉄の歴史を踏みにじる事になってしまうのではないか？
樋田は悩みに悩んだ末、廃棄処分を撤回しミルヒ号の保存を決めた。
北急を解体する社長から、北急を守る社長となったのだ。

「これ、走らせられますか」
誰とは無く発せられたその言葉に
「ああ、走るとも。ちゃんと整備して来たからの」と頷く善さん。
皆が目を合わせた。
「じゃあ、やりましょう！」
「よし、動態化復元工事開始だ」
「シゴナナとの並行作業だ、これから忙しくなるぞ」
工場に再び活気が漲る。

夕暮れの相模大川工場の構内の試運転線で、試運転が始まった。
その一角では、整備員たちが口々にアイディアを出しあって検討している。
「保安装置のHM-ATS車上子をのせれば本線も走らせられるんじゃないか。
HM-ATSの機器の小型化はできるから、搭載したらあとは乙種でいいから輸送してよねでん線小倉嵐山に運んで。
でも車体がいっぱいいっぱいだから、床下にATS車上子を吊るす場所があるかなあ」
「電源は小さなトランス積んで電灯用の電気で行けるか?」
「いやいや、小型のタービン発電機を増設したほうが･･･」

みんな我を忘れ夢中になって検討している。

「Jung; Meinung, und ist gut.（若いって、いいわね）」
ドイツ語で、彼女がそれを見ながら微笑んだ。
「Bei allem!（まったくだ）」
そうドイツ語で答える善さんの手と、彼女の手は、60年の時を越えて、結ばれていた。

　そして、樋田社長がその後、北急新本社ビル・ロマンスタワーで彼女と話した。
「ありがとうございますリットマン会長。御社との関係は今後も万全に保って行きたく存じます」
「樋田社長も。我がアセア・マッファイ社も御社との関係を通じて、深く米田重工との協力ができ、次世代ICE開発に大きな影響力を占めるにいたっております。
　国際高速鉄道競争と呼ばれますが、しかしそれも安全を軽視しての競争であってはならない。
　一致して安全に協力した上でこそ、競争はあり得る。これは絶対に逆さにできないことです。
　安全技術についての知見を学びながら、その価値を高めていくところで、我社はICEグループの中で名誉ある地位にいられるのです」
「まさにそのとおりです。ルールなき競争万能主義は犠牲が大きすぎる。ルールの設定は必要であり、我々はそのルール設定においては競争ではなく協力しあう。
　それが運輸交通に携わる企業の最優先の矜持です」
　サインをする彼女に樋田は頭を下げた。
「しかしなかなかなビジネスでしたね。樋田社長、あなたはこのようにかけずり回って、はたしてその報酬は?」
　互いの秘書が契約書を交わし、彼女と樋田社長はもう一通をサインする。
「いえ、かつてのマネーゲームで報酬などもう飽きました。
　今はこの会社の社長として、社員一人一人と、夢の鉄道の実現のためにがんばれる生活が、すでに私の大きな喜びです」
「素晴らしい。私も常にそうありたいものです」
　お互いに契約書を交わし、握手して彼女は微笑んだ。
「今回の訪日で、御社のヘル・ヨシカワにお会い出来た事が何より嬉しかった。

　私の兄も、同じ鉄道員の彼との文通をなによりの楽しみとしていました。
　落成したミルヒ号と、それを颯爽と運転する彼を収めた白黒の写真一枚で、私は恋に落ち、以来60年憧れ続けておりました。
　一度で良いからヘル・ヨシカワの運転するミルヒ号に乗って旅に出たい、と」
「その夢がもうすぐ叶いますね」
　樋田が微笑む。
「ええ。ありがたいことです」

　その数日後。
　初夏の日差しのもとで開催された復興支援北急相模大川電車まつりに、動態化なったC57と並んで元気に煙突から薄い煙を上げる「奇跡の機関車」ミルヒ号ことM式１号機関車と、そのキャブ内で、心地よい緊張の表情で加減弁を握り締める善さんの姿があった。
　その眼差しは鋭いが、口元は少し緩んでいるようにも見える。
　そして後続のトロッコ客車では、彼女が静かに発車のその時を待っている。

「善さん、初デートなんだから運転は慎重に」と助士の梅沢がふざけ、皆が笑う。
「こら！　あまり年寄りを冷やかすんじゃないわい」
　拳を振り上げて叱り付ける善さんだが、目元は笑っている。
　ベテラン機関士善さんの前では、あれほどいかつく怖い指導機関士だった梅沢もまるで子供扱いだ。
　そしてその視線が、後続の客車の彼女とアイコンタクトした。

「注水やめ！」
　ミルヒ号のボイラ内に水を送り込むのは蒸気ポンプではなく、昔ながらのインゼクタである。
　インゼクタはポンプと違い、ボイラの蒸気を使って霧吹きのように送り込む装置なのだが、扱いが難しく失敗するとボイラ内に給水するはずの水をそのまま線路にダダ漏れさせてしまう。
「ほう、なかなか慣れたもんだな」
　そう褒められながらインゼクタのコック閉を確認して微笑むのは来島だ。
　来島も動態保存蒸機の運転について学習、研究と研鑽を積んでいる。
「勉強してますからね。でもやっぱり蒸機のキャブは暑いですね」
「バカモン、蒸機は暑くてナンボ。おまえさんがたのクーラー付き新型インバータ電機とはわけが違って当然じゃ！」
「それもそうですね」
　来島は投炭しながら笑った。
「ここ一番の晴れ舞台だ。ミルヒ号に恥はかかせられん。しっかりせんとな」
　そのミルヒ号の安全弁がププ、プッブッ、と噴きかける。
「よーし、いい子だ！　投炭やめ！　このままいくぞ！」
　善さんがそう言いながら加減弁と逆転機、そして２つのブレーキ弁をいとおしむ。
「それにしてもこの子元気ですね！　圧力すごくいいですよ！」
　あまりの罐の素直さに来島が驚く。
　少し前までクラで寝ていたとは思えない状態の良さ、
　再び命の火が入った罐の喜びの声が伝わって来るかの様だった。
「当たり前だ！　誰が整備したと思っておる。このワシが手塩にかけた罐じゃぞ！」
「しかしほんと、機嫌よく圧力が上がるもんだ」 梅沢も口にする。
「ああ。良く覚えておくんじゃ。これが罐のご機嫌が本当にいい時の音だ。
　罐の運転は一にも二にも蒸気の使い方、これに尽きる。

　圧力は上り坂寸前でこの状態、安全弁が噴く寸前で抑える事じゃ。
　一旦噴かしちまったが最後、一気に圧が下がり焚いた石炭を何キロ分も無駄にする。
　しかし焚いて圧力をあげてやらんと勾配に挑む力が出ん。
　そこで運転路線ごとに最善の状態で大きな勾配に挑めるよう常に逆算し、将棋指しのように投炭と加減弁の手の先を読むんじゃ。
　それがかつての機関士甲組、それも蒸機甲組の技じゃ。
　なりは小さくとも、立派な罐。コイツから学べることは大きいぞ!!」
「はい！!」
　梅沢や来島以下、みな声を揃える。
「よし、いくぞ！」
　善さんがポッポ、と汽笛合図し、ミルヒ号の出発準備ができたことを知らせる。
　それに応じ、構内係の緑色旗が大きくふられる。
「発車！」
　なんとも可愛らしい再びの汽笛一声、初恋の二人の夢を乗せた奇跡の機関車は、今、力強く走りだした。

<Text end>

奇跡の機関車

http://p.booklog.jp/book/25869

著者：米田淳一
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/yoneden/profile

発行所：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/25869

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/25869